

第5章 総括

本遺跡は、縄文時代の落とし穴と奈良時代の掘立柱建物跡が調査成果の大部分を占めており、この2つについて述べることで総括とする。

第1節 落とし穴について

1 はじめに

鳥取県内では、縄文時代の落とし穴の検出数が3,000基を大きく超えており⁽¹⁾、大山北麓の丘陵上では、ある程度の面積を発掘調査すると、ほとんどの遺跡で落とし穴を検出するといっても過言ではない。中国地方では落とし穴のメッカともいえるこの地域において、既に多くの調査と検討がなされてきたが、明らかになった事柄は必ずしも多くはない。その遺構の性格上、遺物を伴うことはまれで、時期決定が困難なことや、深く狭い遺構の形状が詳細な観察を困難にしていることも、こうした状況を生じさせる要因となっているのであろう。

前章までに述べたとおり、本遺跡では落とし穴を42基検出し、縄文時代の狩猟場と位置づけられる。この42基という数は、調査面積(6,680㎡)を考えると、大山北麓という地域を考慮してもかなり充実した数といえるだろう。また、遺跡内には奈良時代の遺構の他は、時期不明の遺構が少数存在するだけで、落とし穴を検討する上では非常に雑音の少ない遺跡といえる。落とし穴を検討する上では好条件の整った遺跡である。ここでは本遺跡の落とし穴を分析し、大山山麓における落とし穴による狩猟場の一つのモデルケースを提示することで総括とする。

2 形態分類

落とし穴の形態分類は、これまでも平面形、底面ピットの有無、底面ピットの特徴などによって多くの案が示されている⁽²⁾。当遺跡も落とし穴の形態は一様ではなく、特徴の異なるグループに分けられることは調査段階から認識できた。平面形については、円形、長方形、楕円形があり、底面ピットも有無の違いが存在した。一方、各遺構間で土層断面を比較する中で、土色や土質、含有物の傾向の差よりも、断面形においていくつかの形態差が看取できた。ここでは、平面形、底面ピットの特徴に加え、断面形についても検討を加え、形態分類を行うこととする。

平面形

円形(A)、楕円形(B)、長方形(C)、隅丸方形(D)の四者がある。第3章で述べたとおり、検出上面は本来の開口部上面をとどめていないことが多く、底面の平面形を重視して判断している。

底面ピット

底面ピットの有無で二者に分けた。多くは1つの穴であったが、一部では複数の小穴からなるもの、複数の杭を束ねた

表26 落とし穴の形態分類

| 平面形 | 断面形 | 底面ピット (有無) | |
|------|-----|---------------|-----------|
| 円形 | A | 垂直形 | a 有り / 無し |
| | | 外傾形 | b 有り / 無し |
| | | 外反形 | c 有り |
| | | くびれ形 | d 有り |
| | | 徳利形 | e 無し |
| | | 袋形 | f 無し |
| 楕円形 | B | 垂直形 | a 有り |
| | | 外傾形 | b 有り / 無し |
| | | 外反形 | c 有り |
| 長方形 | C | 垂直形 | a 有り |
| | | 外傾形 | b 有り |
| | | 外反形 | c 有り |
| 隅丸方形 | D | 外傾形 | b 無し |
| | | くびれ形 | d 無し |

ことが看取できるものなどがあり、詳細な点については必要に応じて個別に述べることとする。

断面形

主に壁面の形状から、6つに分類した。なお、断面方向は長軸側での比較を基本とする。

a類：壁面が垂直に立ち上がるもの(垂直形)。底面ピットは有無の二者がある。

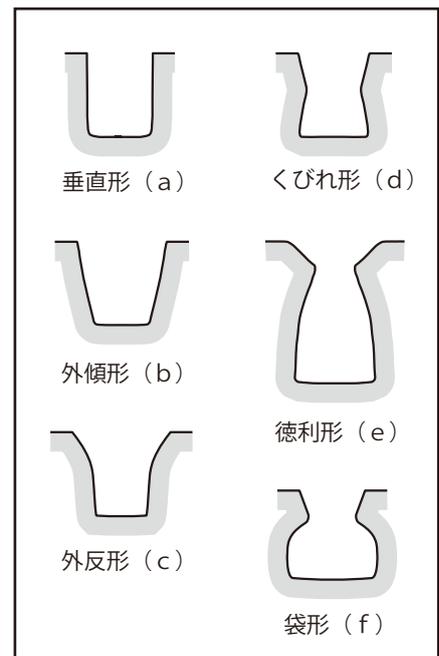
b類：壁面が底面から開口部へ向けて直線的ないしやや椀状に広がるもの(外傾形)。底面ピットには有無の二者がある。

c類：壁面が外反するもの(外反形)。底面ピットを有する。

d類：壁面が中位でくびれるもの(くびれ形)。底面ピットを有する。

e類：開口部からいったん口がすぼまり、下部でまた径がやや広がるもの(徳利形)。底面ピットを伴わない。

f類：壁面が袋状をなすもの(袋形)。底面ピットを伴わない。



第112図 落とし穴の断面類型

平面形、断面形、底面ピットの3要素を複合させ、落とし穴を分類する。平面形と断面形のアルファベットを組み合わせ、さらに底面ピットの有無を加え、平面形-断面形-底面ピットの有無の順に「A a有類」「A b無類」などと3文字で表現する。

3 分布状況

平面形のみで比較しても、分布状況は四者で異なっている。円形のもの(A)は調査地の東西両丘陵上に分布しており、長方形のもの(B)は谷部の谷筋に沿って、楕円形のもの(C)は谷部及び西尾根に、隅丸方形のもの(D)は東尾根に分布している。この分布の傾向からでも、調査地の東西二つの尾根と谷部が落とし穴の配置に関連していることがわかる。

断面形、底面ピット有無を含めて分布傾向を整理すると、次の10の群(群1～群10)を設定することができる(第113～116図)。

群1

西尾根北西に位置し、尾根の西側を尾根筋方向に分布する。B b有類(土坑1・3・4)で構成される。黄褐色・褐色系の埋土が中心で、他の落とし穴埋土と異なり、黒色系の埋土を多く含まない。容積の平均は0.61m³。

群2

西尾根北側に位置し、等高線に沿った方向に分布する。A d有類(土坑2・5・6・7・18)で構成される。最下層もしくはその付近に色調が比較的明るく、薄い堆積が認められる点でも共通する。容積の平均は0.50m³。

群3

西尾根中央付近の南寄りに位置し、尾根筋方向に分布する。A a有類(土坑9・10・12・13)で構成される。深さは検出上面径0.82～0.96m、深さ0.88～1.08と規模の小さいことでも共通する。この周

辺は皿層がほとんど遺存しておらず流失したものと考えられ、このことから開口部を含め上位部分はかなり失われていると推定する。容積の平均は0.42m³。

群4

西尾根東側の南寄りに位置し、B b有類(土坑14・16・30)で構成される。埋土が黒褐色土を主体とすることでも共通する。容積の平均は0.64m³で、群1～10の中で最も大きい。

群5

群4と同じく西尾根東側の南寄りに位置する。B b無類・B b有類(土坑15・29)で構成される。同じく平面形が楕円形をなす群4や群6に比べ、径が小さい。底面ピットについて、土坑15には無く、一方、土坑29は有するものの浅く目立たない。これは底部の処理に共通性があるのかもしれない。褐色・黄褐色系の埋土が目立つ事でも共通しており、こうした埋土の特徴は、群1との関係がうかがわれる。容積の平均は0.47m³。

群6

谷部北側から西尾根にかけて位置する。B b有類・B a有類(土坑11・21～23)で構成される。群4のB b有類に比べ浅く、底面最大長が長い。平面形は長方形にやや近い形状であり、同じB b有類でも群4とは異なる特徴をもつ。容積の平均は0.56m³。

群7

谷部の谷筋に沿って並ぶ。C a有類・C b有類・C c有類(土坑19・20・25・28・32・33・35)で構成される。断面形の差異は小さく、いずれも4つの辺と角が明瞭で、明確に意図して箱形に仕上げていることがうかがえる。1～3層の黒色系土が基本となる、単純な堆積を示す埋土である。

埋土の堆積が単純なのは、谷筋に位置するため、黒ボク土の流入が短期間に起こりやすかったためかもしれない。底面ピットにはバリエーションがあり、4本の小穴をもつもの(土坑32)、2本の小穴をもつもの(土坑33)、1つの底面ピットに3つの小穴があるもの(土坑35)がある。容積の平均は0.41m³。

群8

東尾根の尾根筋に沿って位置し、A a無類・A e無類(土坑34・36・38・40)で構成される。南側と北側で30m以上の間隔があり、やや距離が離れるが、底面ピットを伴わない共通点を重視し一つの群とした。群9においても東尾根の中央付近を挟んで距離があり、この付近には他の落とし穴も分布していないことから、立木などの障害物が存在していたのかもしれない。容積の平均は0.59m³。

群9

東尾根の尾根筋に沿って並ぶ。D b無類・D d無類(土坑37・39)で構成される。隅丸方形のものはこの2基のみで、浅いのが特徴である。また、埋土は黒褐色土を主体とし、最下層に褐色土が薄く堆積することも共通している。容積の平均は0.28m³で、群1～10の中で最も小さい。

群10

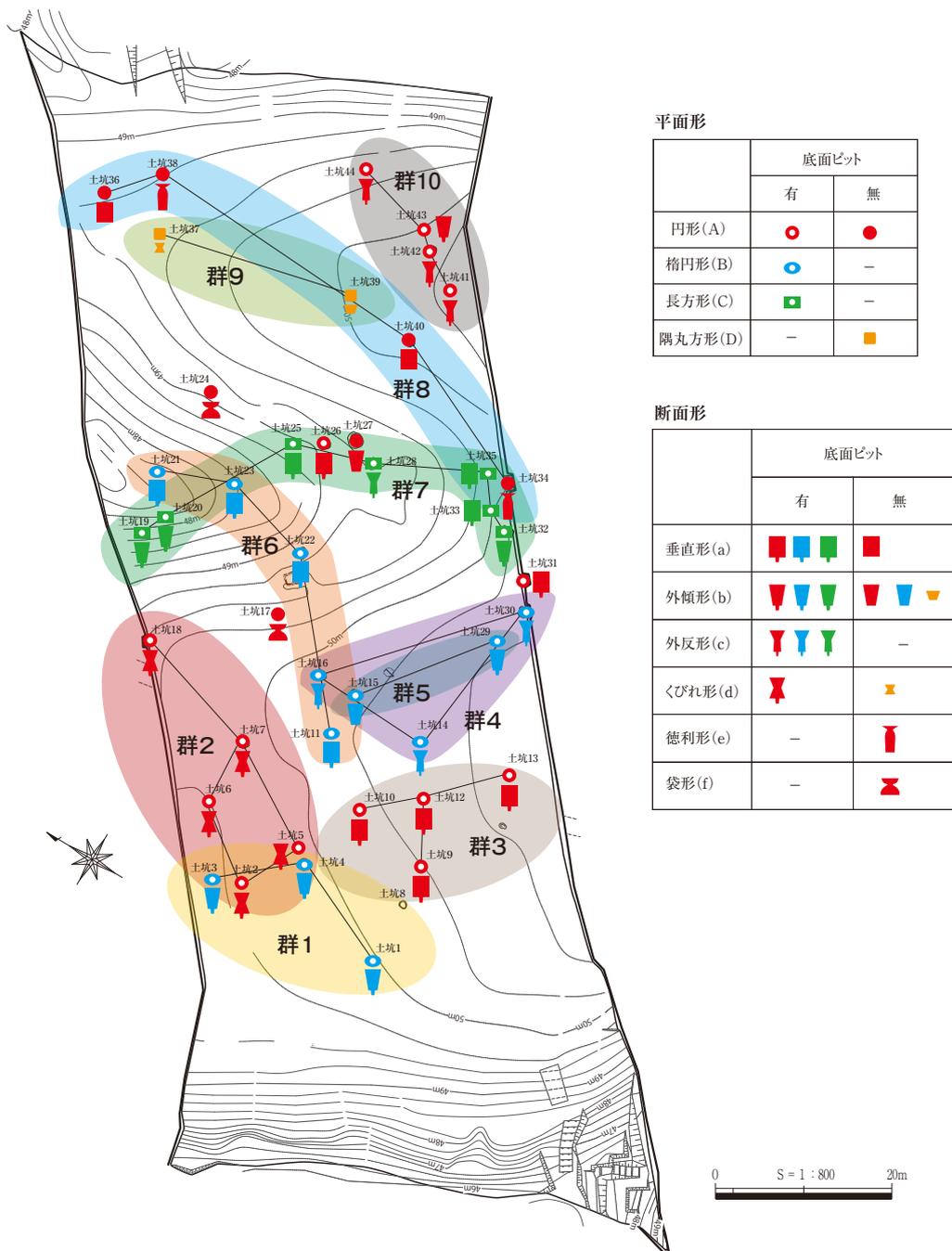
東尾根南東、尾根の山側に位置する。A b有類・A c有類で構成される。他群よりも埋土に黒色土の割合が高い点で共通する。容積の平均は0.38m³。

これら群1～10は、それぞれ他の群と位置があまり重複せず、排他的な分布状況を示している。散漫な分布を示さず、落とし穴の形態的特徴が群にまとまることから、設定した各群は、同じ集団によるものと考えられる。逆に、群の違いはつくり手の違いであり、時期差を含んでいることもあるだろう。

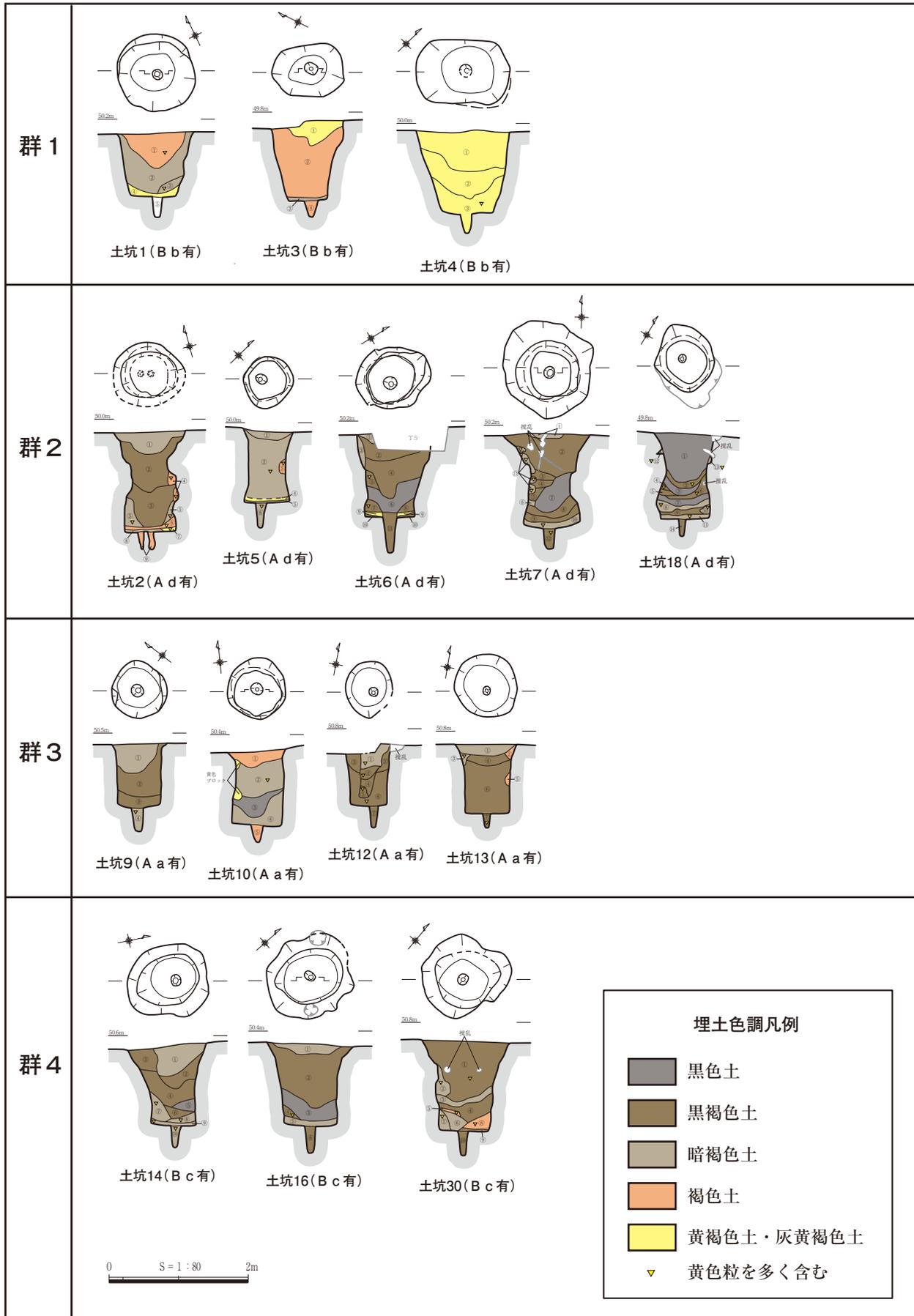
う。また、このような分布状況は、地形上の特徴によって繰り返し同じところに配置するのではないことを示しており、時期によって変化する獣道に対応した結果かも知れない。

これらの群の地形との関係に注目すると、尾根上に分布するもの(群1～5・8～10)と、谷筋に分布するもの(群6・7)とがある。

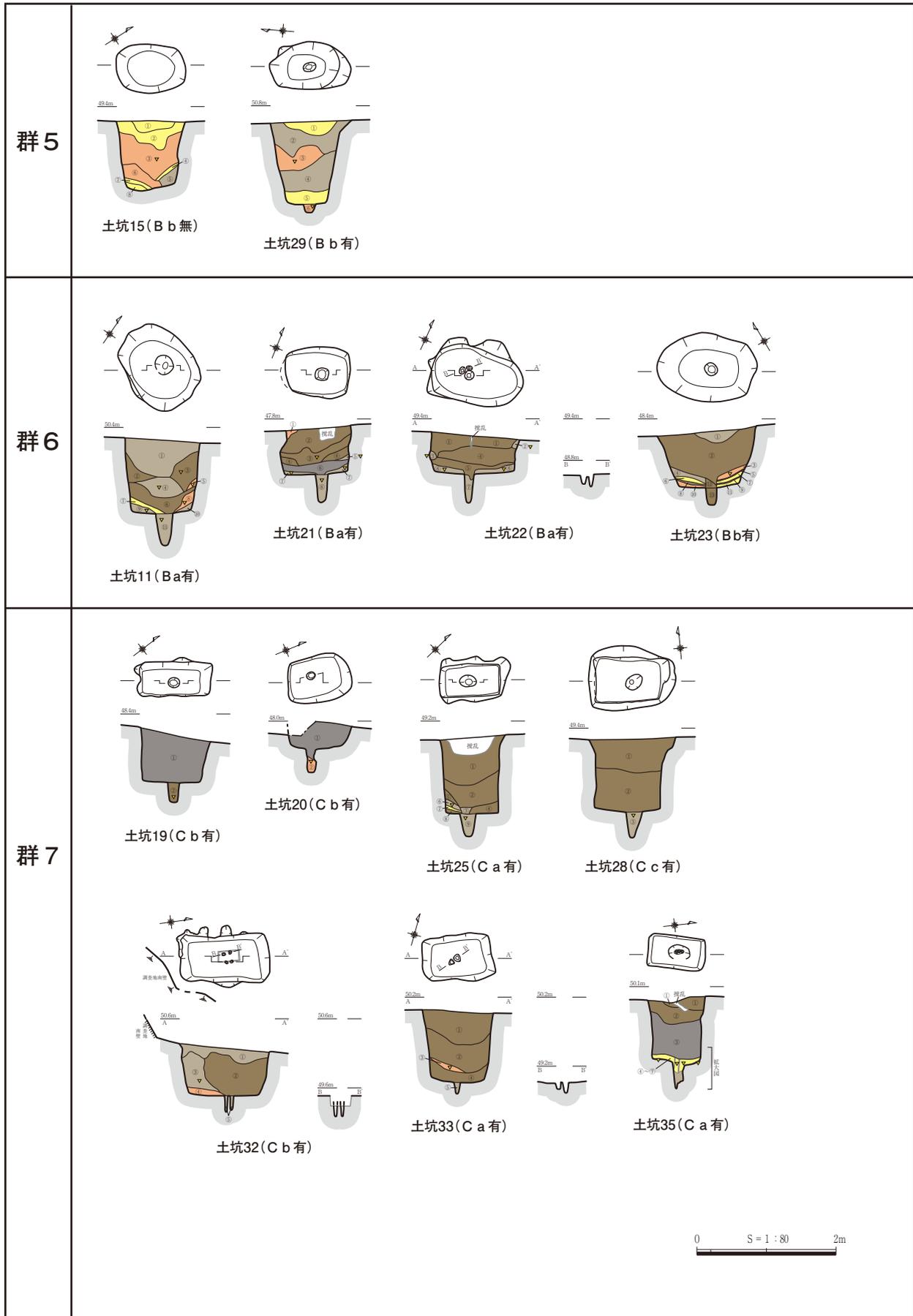
谷筋に位置する群7は7基からなり、調査地際まで分布している状況から、南北調査地外にも続いていると考えられる。一方、他の群は3～5基から構成されており、群8を除く8つの群(群1～6・9・10)は群7にみられるような調査地を貫くほどの広がりはなく、一部が調査地外に展開する可能性はあるものの、見込まれる増加数は2、3基程度であろう。これらの群は、一つの群が多くと



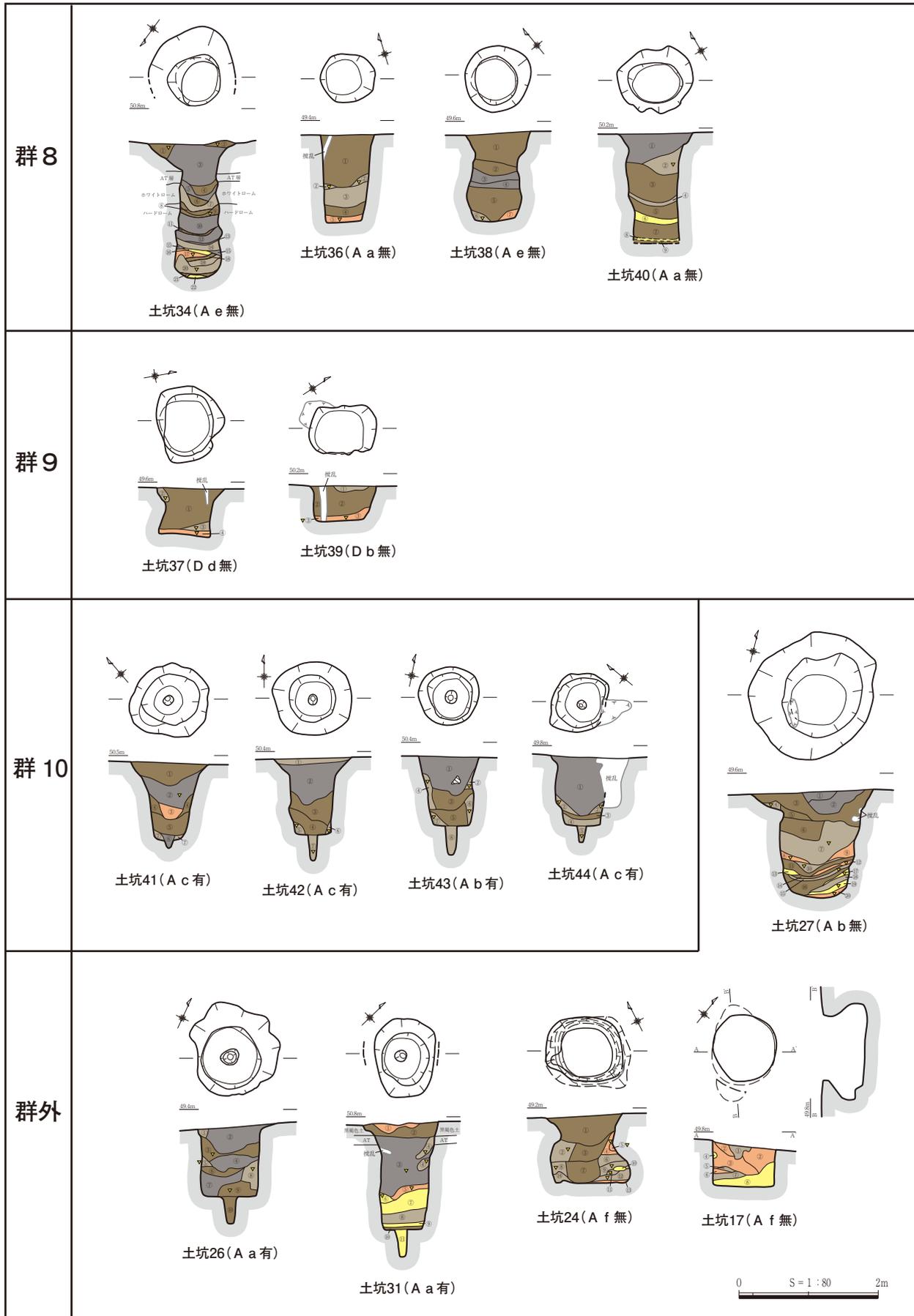
第113図 落とし穴の群分布



第114図 落とし穴の群構成(1)



第115図 落とし穴の群構成(2)



第116図 落とし穴の群構成(3)

第5章 総括

も5、6基で構成されていたと推定する。

群内の分布のあり方に目を転じると、落とし穴の間隔は、2.4m～33.9mと幅があるが、7～12m未満が多く、群ごとにも間隔が異なっている(第117図、表27)。平面形が円形で、底面ピットを有する群2・3・10は間隔が短く、ほとんどが10m以下の近い間隔で配置されている。平面形が楕円形を呈する群1・4～6は間隔が10mを超えるものが多く、群2・3・10よりやや間隔が長い。

これらに対し、群7は2～17m、群8は4～34m群9は22.8mと間隔に幅がある。群7・8は、前述のとおり調査地外まで列状が続くと考えられ、「群」よりもむしろ長距離の「列」的な配置のため、間隔に長短が生じるのかもしれない。

これらのことから、各群は次の4つのグループに整理することができる。

①円形・隅丸方形で底面ピットを伴わないもの(A e無類・D b・d類、群8・9)

東尾根上に分布し、落とし穴間隔は他群より長い。

②円形で底面ピットを伴うもの(A a～d有類、群2・3・10)

東西尾根上に分布し、落とし穴間隔は比較的短い。

③楕円形で底面ピットを伴うもの(B a～c有類、群1・4・5)

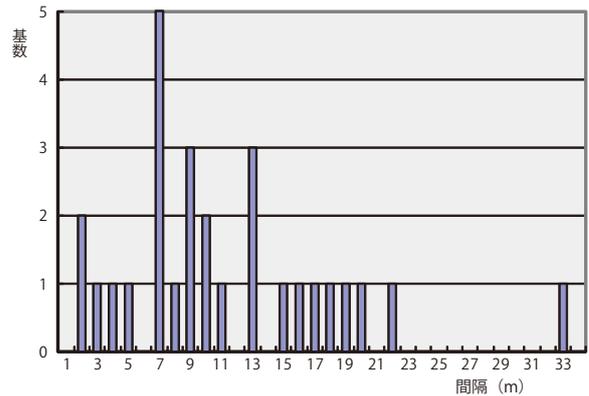
尾根上及び一部谷部にも分布し、落とし穴間隔は比較的長い。

④長方形で底面ピットを伴うもの(C a～c類、群7)

谷部の谷筋に沿って列状に分布する。落とし穴間隔は長短の幅がある。

4 落とし穴の形態変化

形態的特徴と分布状況から、落とし穴に10の群を抽出することができ、平面形と底面ピットの有無、立地などから4つのグループが存在することが想定できた。次に、型式学的な検討を加え、各群の時間的前後関係について検討する。型式学的な検討にあたっては、変化の方向性を見出す必要があるが、落とし穴は、開口部に設える上部構造を伴って罫として完成するのであり、現在目にすること



第117図 落とし穴間隔

表27 群別落とし穴間隔

| 間隔 (m) | 群1 | 群2 | 群3 | 群4 | 群5 | 群6 | 群7 | 群8 | 群9 | 群10 |
|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1.0～1.9 | | | | | | | | | | |
| 2.0～2.9 | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 3.0～3.9 | | | | | | | 1 | | | |
| 4.0～4.9 | | | | | | | 1 | | | |
| 5.0～5.9 | | | | | | | | | | 1 |
| 6.0～6.9 | | | | | | | | | | |
| 7.0～7.9 | | 2 | 2 | | | | | 1 | | |
| 8.0～8.9 | | | | | | 1 | | | | |
| 9.0～9.9 | | | 1 | | | | 1 | | | 1 |
| 10.0～10.9 | 1 | 1 | | | | | | | | |
| 11.0～11.9 | | | | | | 1 | | | | |
| 12.0～12.9 | | | | | | | | | | |
| 13.0～13.9 | 1 | | | 1 | | | 1 | | | |
| 14.0～14.9 | | | | | | | | | | |
| 15.0～15.9 | | 1 | | | | | | | | |
| 16.0～16.9 | | | | | | | 1 | | | |
| 17.0～17.9 | | | | | 1 | | | | | |
| 18.0～18.9 | | | | 1 | | | | | | |
| 19.0～19.9 | | | | | | | | 1 | | |
| 20.0～20.9 | | | | | | 1 | | | | |
| 21.0～21.9 | | | | | | | | | | |
| 22.0～22.9 | | | | | | | | | 1 | |
| 23.0～23.9 | | | | | | | | | | |
| 24.0～24.9 | | | | | | | | | | |
| 25.0～25.9 | | | | | | | | | | |
| 26.0～26.9 | | | | | | | | | | |
| 27.0～27.9 | | | | | | | | | | |
| 28.0～28.9 | | | | | | | | | | |
| 29.0～29.9 | | | | | | | | | | |
| 30.0～30.9 | | | | | | | | | | |
| 31.0～31.9 | | | | | | | | | | |
| 32.0～32.9 | | | | | | | | | | |
| 33.0～33.9 | | | | | | | | 1 | | |

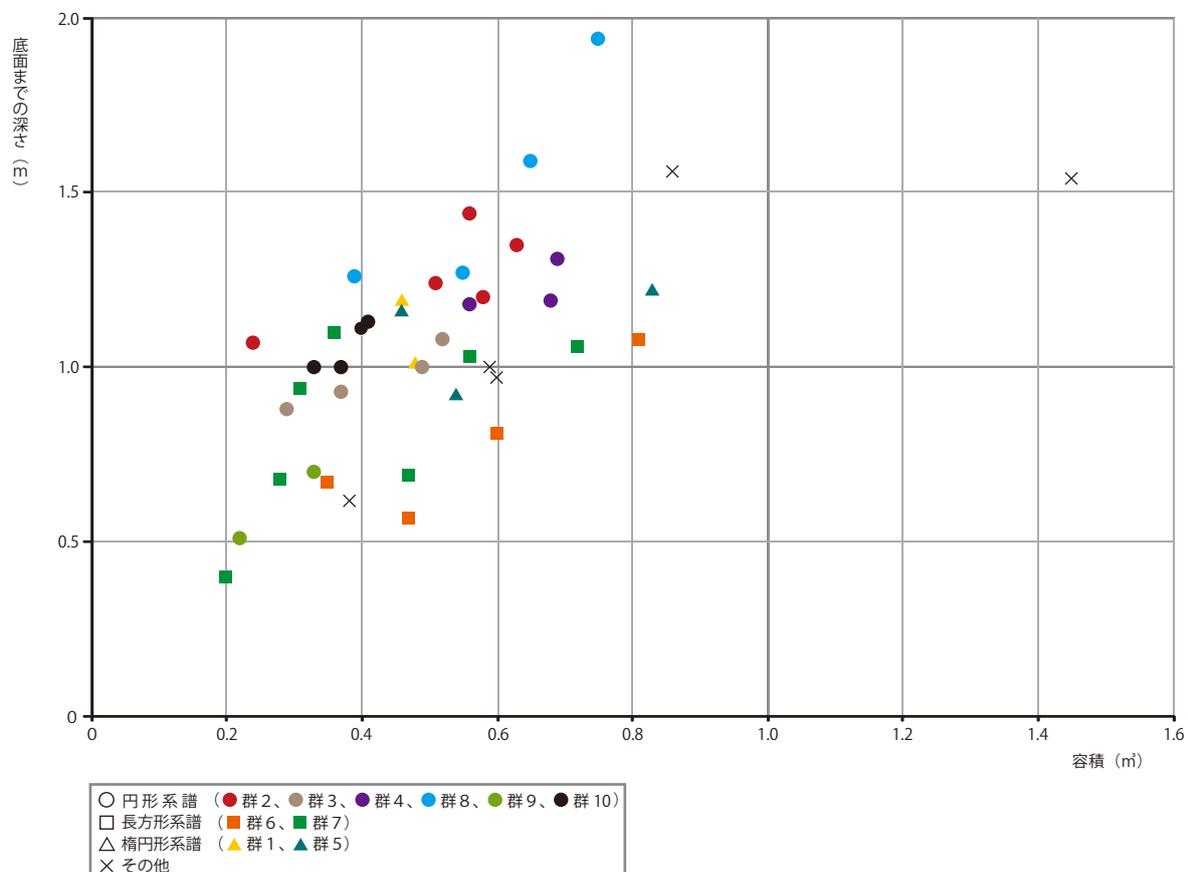
のできる下部構造のみでは、変化の方向性を見極めにくい。そこで、形態に加え、落とし穴の規模にも注意を払うことで、変化の方向性を検討する。具体的には、規模を示す指標として落とし穴の容積に注目し、形態と容積の二つの要素から各グループの変化の方向性を推定しつ、前後関係や系譜について考える。さらに放射性炭素年代測定で得られた結果も加えて検討し、各群や各系譜の時間的前後関係についても整理する。ただし、今回の放射性炭素年代測定にあたっては、試料中から測定を実施できるだけの炭質物が得られず、土壌全体を測定試料としているため、具体的な年代の取り扱いには注意が必要である。ここでは、主に相対的な前後関係について参考とする。

円形系譜

4つのグループのうち、①・②グループは平面形が共通し、尾根上に分布することでも一致しており、一つの系譜上にあると考える。この中で放射性炭素年代測定を行っているのは、土坑10(A a有類)、34・38(A e無類)、36(A a無類)、42(A c有類)であり、その結果によれば、A e無類→A a有類→A c有類→A a無類の順序である。

古く位置付けられるA e無類の土坑34は、底部付近にしまりが強く、人為的に固められた可能性がある。意図的に固めたとすると、その理由は、杭を固定するためであったと推定することは、さほど不自然では無いであろう。底面から地山をピット状に掘り込んでいないため、杭痕の痕跡が残らないのであり、使用時には杭を伴っていたと考える。底面ピット出現前の底部処理であろう。他のA e無類にも杭が伴っていた可能性がある。

放射性炭素年代測定を行っていないA d有類(群2)は、開口部から下で断面形が一度くびれ、再び底部へ向けて広がる点でA e無類(群8)と共通しており、A a有類(群3)・A c有類(群10)に先行す



第118図 落とし穴の規模

ると考える。断面形がくびれる特徴は、底面に杭を設置する作業のために、一定のスペースを確保しようとして底部付近をやや広めに掘削しているのだろう。A e 無類の土坑34でみられる底部付近のしまりの強い土や互層状の堆積と、A d 有類である土坑7・18底部の付近にみられる互層状の堆積は、杭設置・固定に関わる同種の行為を反映したものかもしれない。

A d 有類(群2)以後について検討すると、検出部径はA d 有類(群2)→A c 有類(群10)→A a 有類(群3)だが、底面径で比較すると、A d 有類(群2)→A a 有類(群3)→A c 有類(群10)と縮小しており、これと対応するように容積も同じ変化をたどる(群2 : 0.50m³→群3 : 0.42m³→群10 : 0.38m³)。変化の方向としてはA d 有類(群2)→A a 有類(群3)→A c 有類(群10)と変遷したと考える。放射性炭素年代測定結果もこの変遷と矛盾しない。

第3章で述べたとおり、群3の周辺はⅢ層がほとんど遺存しておらず、開口部は大きく失われていると判断でき、垂直型(a類)とみえる残存形態も、開口部は開いていた可能性がある。これに対し、群10は、他の群では見られない、各埋土の黒色土が上層に堆積する共通点がある。これは時期的に新しく形成された黒ボク土が、埋没過程の後半で流入し、遺存状態がよいのかもしれない。あるいは、群10は西尾根に展開する群2・3と異なり、東尾根に位置しており、こうした立地の違いに原因が求められるかもしれない。群10が群3よりも検出上面の径が大きいのは、このような遺存状態のよさによるもので、円形系譜の容積変化の方向は容積縮小へ向かっており、本来は群3も開く開口部を伴う外反型(c類)であったと考える。以上のように、A d 有類からA c 有類へは、底部径の減少が進む。容積減少する中で深さも減少し、底部までの掘り下げや、杭の固定が比較的容易になっているのかもしれない。下部の容積は減少させるが、開口部は一定の広さが必要であり、その結果、外反型の断面へと変化していったと考える。

放射性炭素年代測定によれば、A a 無類の土坑36が円形系譜の中で最も新しい年代を示している。

同じく底面ピットを伴わないA e 無類の土坑34・38とは位置的にも同一群と考えてきたが、800年以上の時間差があり、別の群と考えるべきかもしれない。基本的には底面ピットの伴わないものから伴うものへと変遷すると考えられるが、土坑36のようなケースも存在したのであろう。

以上の検討から、①・②グループは円形系譜としてまとめることができ、A e 無類(容積0.65m³)→A d 有類(容積0.50m³)→A c 有類(容積0.38m³)と変遷し、容積がしだいに減少していくと考える。群9(D b・d 無類)についても立地及び底面ピットを伴わない点から、ここでは円形系譜に位置付け、群8に近い時期を想定しておく。

楕円形系譜・長方形系譜

次に、③グループは、平面形態を各群で比較すると、円形に近いもの(群4)、長方形に近いもの(群6)、その中間として位置付けられるもの(群1・5)に分けることができる。これに容積の減少方向を加味して整理すると、円形に近いものから長方形に近いものへ向けて変遷することが想定できる(群4→群1・5→群6)。だが、放射性炭素年代測定結果は必ずしもこのようには変遷しておらず、分析した土坑は古い順に土坑22(群6)→土坑14(群4)→土坑4(群1)となっている。このような結果から、これらのグループは一つの系譜ではなく、さらに細分もしくは他系譜との関連で整理する必要があるだろう。

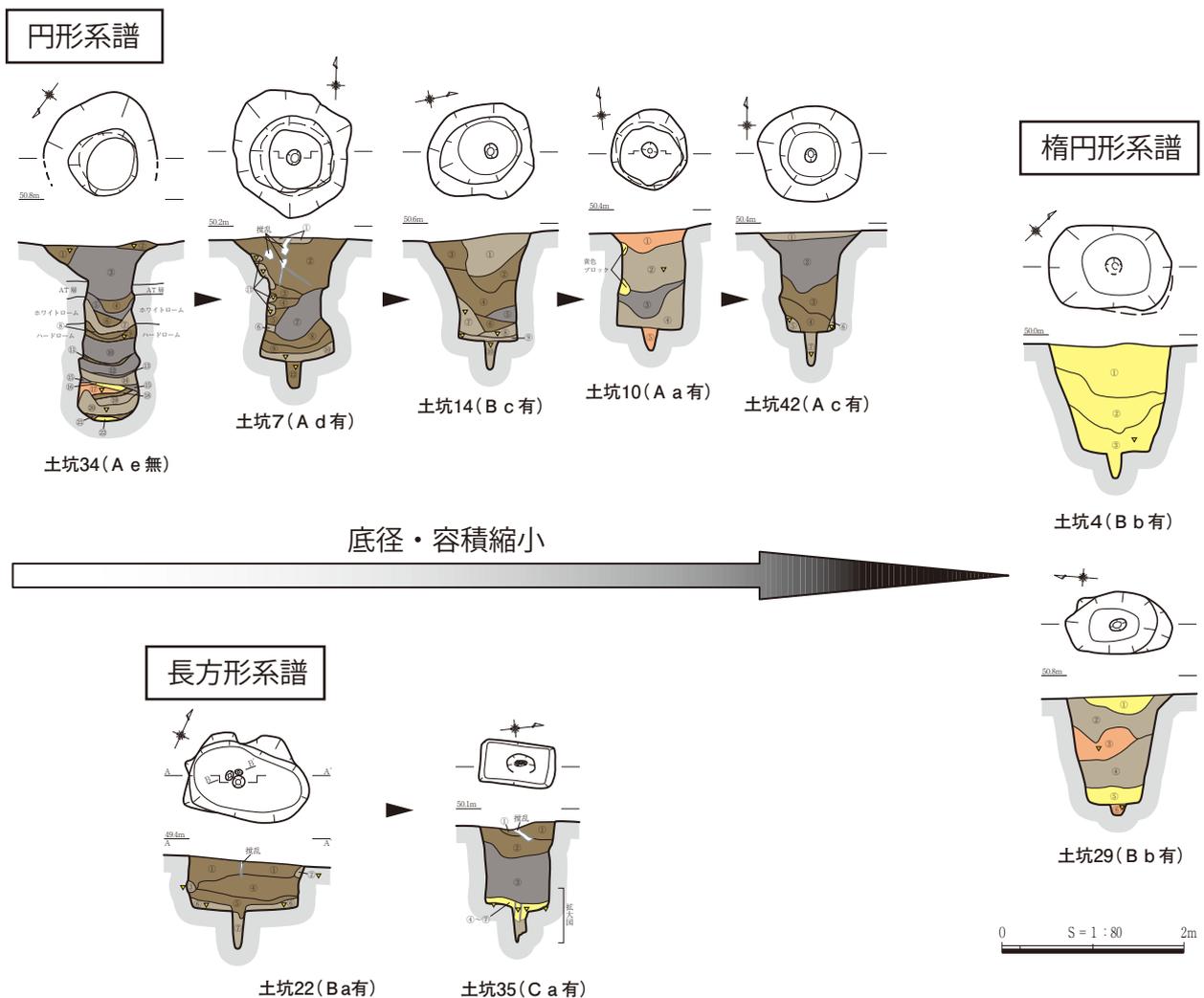
円形に近い群4は、円形系譜との関連で考えると、外反する形状からA c 有類に近いと考えられる。群8に次ぐ容積ではあるが、底面径が長軸で比較しても群2より小さいことから、群2(A d 有類)

と群3 (A a有類)の間に位置付けられると考える。これは放射性炭素年代測定結果とも矛盾しない。

長方形に近い群6 (B a有類)は、形態から群7 (C a～c類)への前段階としてとらえることができるだろう。群7では土坑19・28・35で放射性炭素年代測定を実施しているが、群6から群7への変遷で矛盾はない。なお、容積の変化を見ると、群6 (B a有類)から群7 (C a～c類)で減少しており、円形系譜と同様に、ここでも容積減少へと変化していることがうかがえる。土坑19や土坑35では底面積は小さくなりすぎた結果、このままでは獲物を落とすには穴が小さすぎる規模である。おそらく開口部は大きく開いており、下部は、杭を設置・固定する側面がより重視されていたのであろう。土坑32・33・35では底面ピットが複数の小穴から構成されており、底部施設のバリエーションが増えていることも、こうした変化に沿ったものとして理解できる。

残る群1・5では、土坑4で放射性炭素年代測定を行っており、分析を行った落とし穴の中で最も新しい年代を示している。土坑埋土の色調が黄褐色で、他群の黒色系埋土と著しく異なるため、これまでの系譜とは異なったものとして、楕円形系譜として位置づける。群1・5は規模は異なるものの、形態的には両者で類似しており、黒色系でない埋土の特徴も共通するので、同時期のものと推定する。

以上のように、各群は大きく円形系譜、長方形系譜、楕円形系譜の3系譜に整理することができ、



第119図 各系譜の変遷

それぞれ次のように変遷すると考える(図119)。

- ・円形系譜：群8(A e 無類)→群2(A d 有類)→群4(B c 有類)→群3(A a 有類)→群10(A c 有類)
- ・楕円形系譜：群1(B b 有類)・群5(B b 有・無類)
- ・長方形系譜：群6(B a 有類)→群7(C a～c 類)

各系譜の時期的な前後関係は、放射性炭素年代測定結果を踏まえると、円形系譜及び長方形系譜は明確な前後関係を持たず、一時的にでも2系譜が併行して存在していた可能性が高い。異なる集団が同時期に展開していたことも考えられる。楕円形系譜はこの2系譜の後に展開していたと考えられる。

5 群の変遷と罫の配置戦略の変化

以上のように、落とし穴の形態は、円形系譜・長方形系譜では、容積の縮小が進む中で変化していることがわかる。容積の減少傾向は、当然、落とし穴の掘削作業と密接に関係した動きであろう。

ただでさえ深い落とし穴は、特に杭が伴う場合、杭固定に伴う底部での作業は深くて狭い穴に降りて行わなければならない、穴への出入りや排土の搬出などを行うには、成人一人では困難である。子どもを穴に入らせて、作業にあたらせていたかもしれない(註：稲田孝司先生のご教示による)。たとえば、親子を含む複数で共同作業が行われていたことも想像できる。落とし穴の容積減少を伴う形態変化は、こうした落とし穴の掘削作業についても少なからぬ変化をもたらしたと考えられる。穴が浅くなれば、土量が減り、底部付近での困難な作業も比較的容易になるであろうし、掘り出される土量が減れば、排土の運び出しの手間も減少し、少ない時間もしくは少ない人員で仕上げることができる。落とし穴は数が多いほど、確率的には獲物を獲得する可能性が高まるので、掘削に伴う労力を省くことで、落とし穴の数、ひいては群の数を増やすことに、労力を振り向けた可能性が十分に考えられる。

このような二つの系譜の変遷をもとに、次に調査地内の群の位置的な変遷を整理する。

円形系譜は、まず東尾根に底面ピットのない群8が出現する。同じく底面ピットを欠き、深さの浅い群9は、群8と分布のあり方が類似しており、おそらく同時期に営まれたものと推定する。次に西尾根で底面ピットを伴う群2→群4→群3と展開し、再び東尾根に戻り群10がつくられる。

長方形系譜は、群6が西尾根丘陵から谷部へ、さらに長方形化した群7が谷筋につくられる。

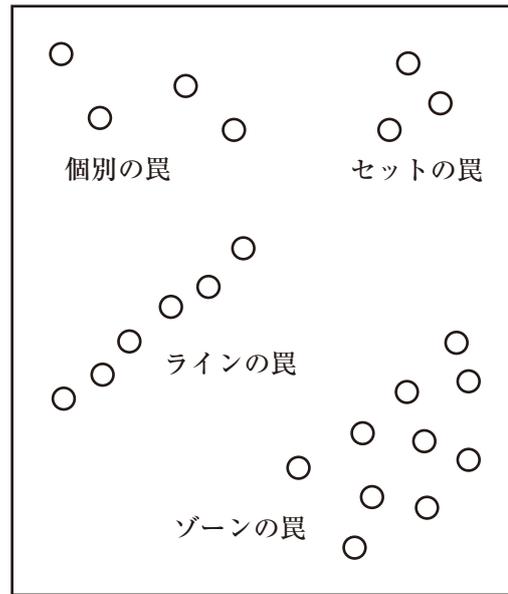
円形系譜においては、時期の変遷と群内の落とし穴の基数に大きな変化はみられないので、容積縮小により得られた労力を、他の地点で別の群を形成することに振り向けたのであろう。

長方形系譜においても、円形系譜と同様の展開が考えられるが、群7においては、やや様相が異なるようである。調査地内では比較的数の多い7基で群を構成しており、また、調査地を貫いて分布していることから、調査地外に列が伸びていると考えられる。円形系譜とは異なり、一つの群の延長を延ばす方へ労力を振り向けている。

これらの変遷は、各系譜とも群内の落とし穴間隔の減少傾向と一致している(表27)。円形系譜では、群8は最大34mもの間隔が開いているが、次の群2では8～16mに縮小する。楕円形を呈する群4では14～19mと開くが、続く群3では8～10m、最後の群10では2m～10mと、間隔の縮小方向に向かう。長方形系譜においても、群6で9～20m、後の群7で3～17mと、変遷に伴って狭い間隔のものが増加している。なお、楕円形系譜は群1で11～14m、群5で18mと、極端ではないがやや長めの

間隔をとっている。

円形系譜と長方形系譜は、時期的には一時併行していたと考えられることから、容積と間隔の変化傾向の一致は、両者が落とし穴猟に関して同方向の指向性を持っていたことをうかがわせる。すなわち、労力をかけて深く掘り、互いに距離をとることで一定の範囲を対象とする、いわば一つひとつの落とし穴にかける期待値が高い状態(個別の罾)から、容積を減じ、掘削を省力化することで、準備できる数の上限を引き上げる方向へ戦略を変容させていることが考えられる。落とし穴基数の増加によって、コンパクトな範囲を対象とする群を複数配置したり(セットの罾)、一つの群内の基数をふやして群を長大化(ゾーンの罾)、あるいは長い列を形成させる(ラインの罾)など、より多様な落とし穴の配置戦略が可能になったであろう。長方形系譜の最終段階、Ca～c有類が谷筋に列状に分布するのも、増加した配置戦略の一つのあり方と考える。



第120図 罾の配置戦略概念図

6. 埋土の堆積について

今回の調査では、落とし穴の埋土について、放射性炭素年代測定以外にもいくつかの自然科学分析を行っている。このうちテフラ分析では、埋土に黒ボク土とロームが混在していることが指摘されており、土坑周囲の黒ボク土が土坑内に流れ込むとともに、壁面のローム層が崩落して堆積が進行したことが推定されている(第4章第1節)。

調査時も、この推定とはほぼ同じ考えであり、底面に近い下層では、一部に埋土固定などのために意図的な埋め戻しがあったにせよ、大部分の落とし穴の埋土は、長い年月で周囲に広がっていた黒ボク土が流入して、自然堆積により埋まったものにとらえていた。

一方で、土坑4のような外観上黒ボク土を全く含まない埋土や、土坑34にみられる互層状の堆積については、埋土の堆積になんらかの特殊な背景がある可能性も想定しており、落とし穴の埋土堆積の過程を理解する目的で、4基の落とし穴について埋土の土色相解析及び軟X線照射による構造解析を行った(第4章第2節)。その結果、分析した4基全ての埋土に含まれる泥塊の大きさが、一般的な水成堆積や陸成堆積の堆積過程で形成されるとは考え難い様相を示すことから、人為的な埋め戻しによる可能性が指摘されている。この中で、土坑14は、大部分の落とし穴埋土と共通する黒ボク主体の埋土であり、分析した落とし穴以外の他の落とし穴についても、同様の過程が認められる可能性を含んでいる。土坑14の解析結果で、埋土中～下層に杭が敷設された可能性が指摘されていることから、落とし穴の補修や再利用に伴う埋土への加工が、他の落とし穴も含めて行われていたことも考えられる。あるいは、何らかの背景によって意図的に埋め戻した例もあったかもしれない。具体的には明らかにし得ないが、別の落とし穴の排土の処理に使われた可能性も指摘しておきたい。落とし穴を掘削すれば、当然、排土が生じる。上部構造の設置にはこの排土を利用したのであろうが、それでも不要と

なる排土がある場合、それらをどのように処理していたかはわかっていない。想像の域を出ないが、こうした排土が、不要もしくは妨げとなる落とし穴の埋め戻しに用いられたことはないだろうか。こうした想定が許されるなら、土坑4にみられる外観上黒ボク土を含まない埋土は、ローム層を掘り抜いた別の落とし穴の排土に由来する結果かもしれない(この場合、土坑4の土壌試料による放射性炭素年代は別の落とし穴の年代を示している可能性がある)。いずれにしても、落とし穴の埋土は、埋没するまでに複雑な過程を経ている可能性があり、単純な自然堆積による埋没過程を想定するだけでは、落とし穴の実態を正確に復元できないおそれがある。

埋土堆積の過程については、大山山麓では、これまで自然科学的手法を加えて具体的に検討されたことはなく、今回の調査における想定と同様に、落とし穴周囲の黒ボク土が自然に流入して堆積したとの認識が一般的であったと思う。今回の構造解析結果が、落とし穴のすべてに該当するわけではないことは当然であるが、落とし穴が自然堆積によって埋没するまで開口していたという単純な想定ではおさまらない、より複雑な事情を想定する必要があるのではないだろうか。

今回の分析は、試行錯誤しながら取り組んだもので、分析対象の選択や採取位置・範囲などさらなる改善が可能であり、必要と考える。今後の落とし穴の調査において、自然科学的手法も活用しつつ、埋土の堆積過程の分析や検討を望みたい。

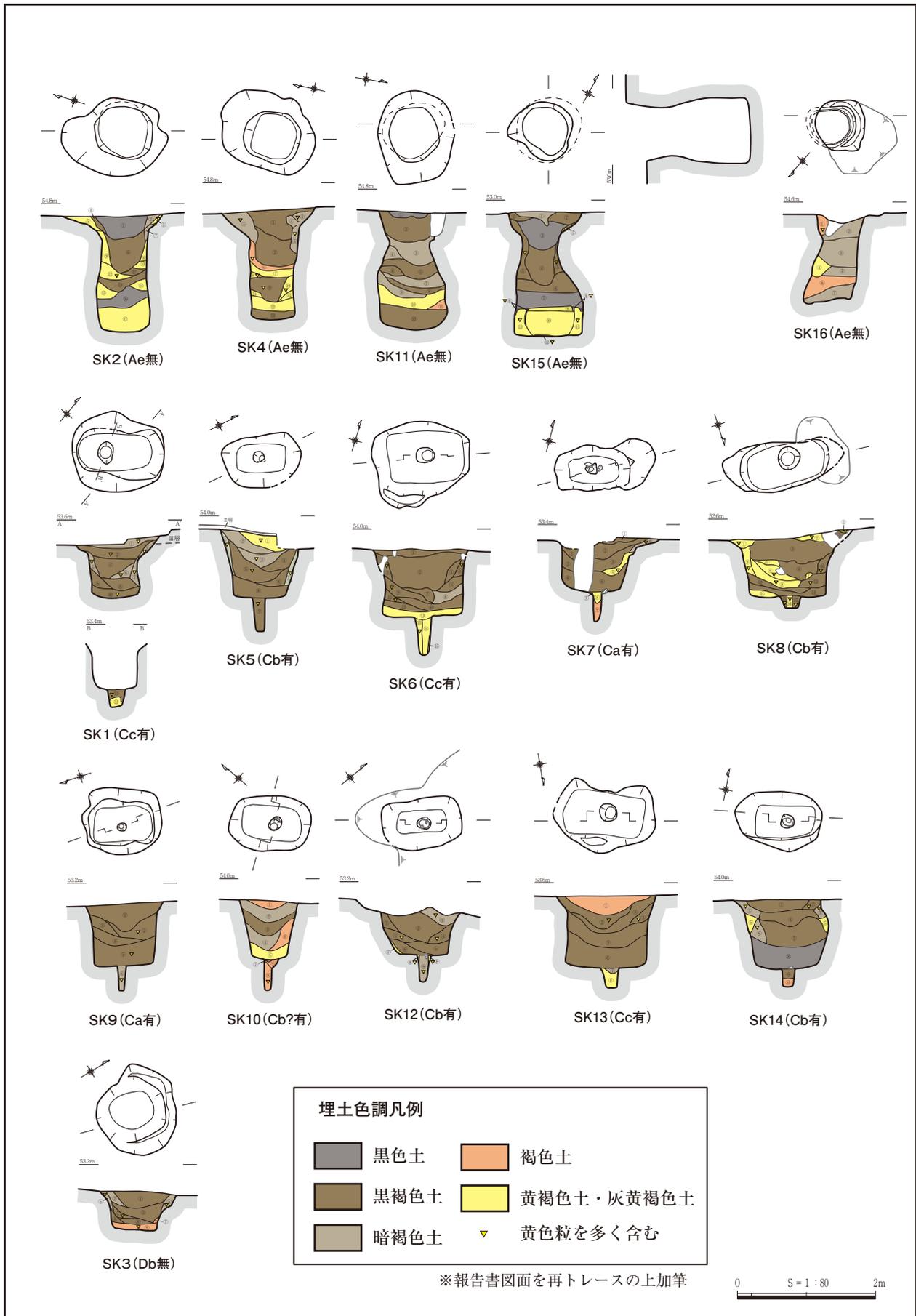
7 周辺遺跡との比較

西坪中中畝遺跡の東西には、谷を挟んで別の丘陵が並んでおり、その丘陵状で縄文時代の落とし穴が検出されている。西に位置するのが西坪下馬駄ヶ峰遺跡⁽³⁾、東に位置するのが西坪岩屋谷遺跡⁽⁴⁾である。

西坪下馬駄ヶ峰遺跡は、北へ向かって延びるなだらかな斜面地から、北東方向の谷へ向かって徐々に傾斜が急になる地形であり、丘陵平坦部の幅は西坪中中畝遺跡よりやや広い。落とし穴は15基検出されており、A e 無類が5基(SK 2・4・11・15・16)、C a～c 有類が10基(SK 1・5・6～10・12～14)で構成されている。このうち、SK15は袋状の形態と、底部に埋め戻された層の外周部が溝状になっていることなどから貯蔵穴と報告されているが、西坪中中畝遺跡土坑34でみられた、底部を一部埋め戻した例と考えられ、A e 無類の落とし穴と判断できる。また、SK16は断面形がいびつで、通常の落とし穴とはやや異なるが、落とし穴の範疇で捉えられると判断した。

落とし穴の分布は、A e 無類が等高線に沿うように1列に並ぶ(列4)。また、この列から約40離れた調査地壁際周辺でもA e 無類が2基検出されている。列状に並ぶものの間隔は約6m、10m、12mで、西坪中中畝遺跡のA e 無類(群8)よりもやや間隔が狭い。これらとは別に、やや角が丸いもののC a～c 有類と判断できるものがある(列1～列3)。調査報告では、底面ピットの杭の設置方法を分類し、これらが等高線に沿う配置と想定しているが、列1・2間に比べ列2・3の間にやや空間があり、分布を東西に分けているように写るため、ここでは等高線を横切るまとまりを考えたい。落とし穴の間隔は4～13mで、西坪中中畝遺跡のC a～c 有類(群7)と同程度とってよいだろう。

西坪中中畝遺跡と比較すると、A e 無類については列状に分布することは共通するが、西坪下馬駄ヶ峰遺跡では尾根筋を横切るように並んでおり、A e 無類落とし穴の展開のバリエーションがうかがえる。C a～c 有類については、等高線に直交する列が展開する点では共通するが、西坪下馬駄ヶ峰遺跡では3列あり、斜面地の広さに対応した結果と推定できる。これらの比較から、同じ形態で構

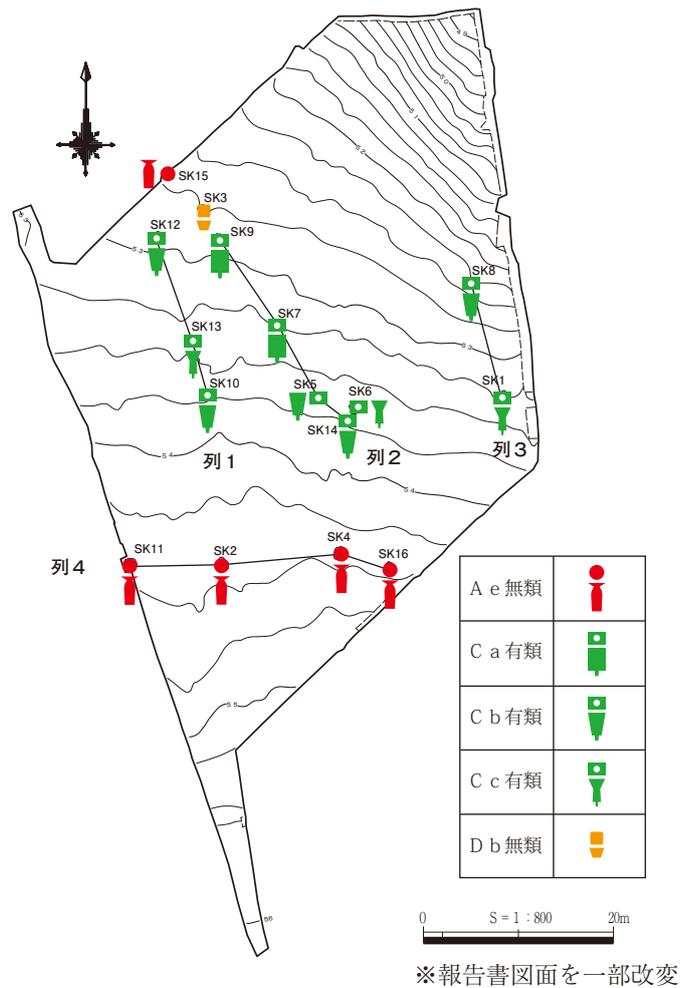


第121図 西坪下馬駄ヶ峰遺跡の落とし穴

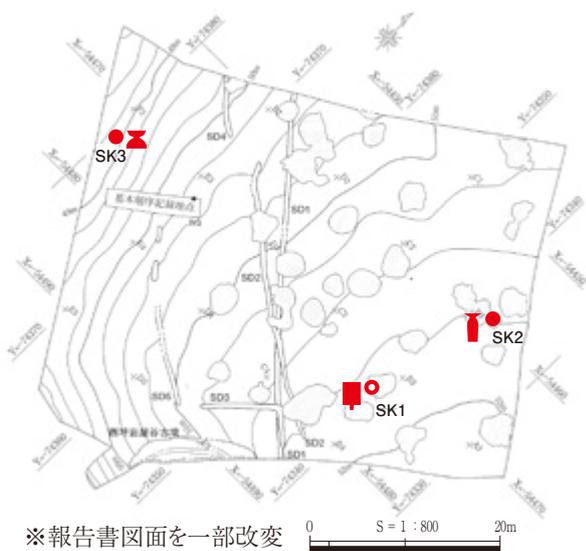
第5章 総括

成される群(列)であっても、その場の条件に応じて展開の仕方に変化しており、獣道や地形的条件などに柔軟に対応していたことがうかがえる。

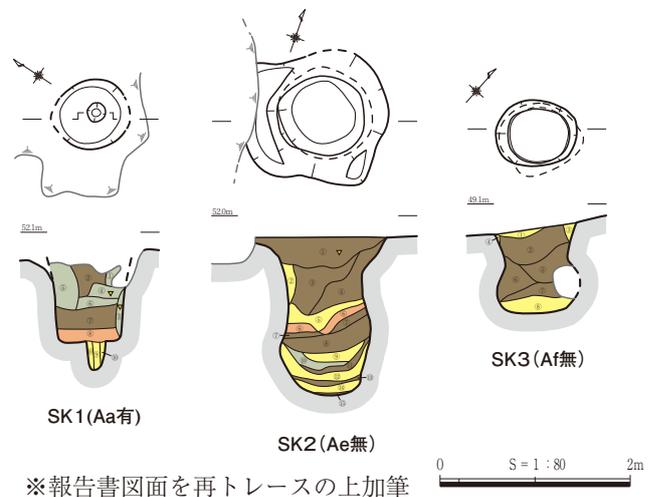
西坪岩屋谷遺跡は、北へ向かって伸びるなだらかな傾斜地に位置しており、西坪中中畝遺跡よりも丘陵先端側に近く、平坦面も狭い。落とし穴は3基検出されており、A a有類(SK 1)、A e無類(SK 2)、A f無類(SK 3)で構成されている。落とし穴の群の端が捉えられたとみられ、各類が単独で存在していたわけではないであろう。ここでもA e無類が存在していることから、西坪周辺では一時期、A e無類が盛んにつくられたのかもしれない。また、A f類が斜面地に位置していることも興味深い。西坪中中畝遺跡で検出したA f無類も谷部への傾斜変換点で検出しており、こうした袋状の落とし穴が一定程度存在し、共通した原理で配置されていることを示しているのかもしれない。



第122図 西坪下馬駄ヶ峰遺跡の落とし穴分布



第123図 西坪岩屋谷遺跡の落とし穴分布



第124図 西坪岩屋谷遺跡の落とし穴

以上のように、西坪地区内にある3つの遺跡からは、断片的ではあるが、近隣地間における落とし穴の共通原理や、展開のバリエーションがうかがえる。他の地域の落とし穴の様相と比較する上で、A e 無類やC a～c 有類は良好な比較材料になるのではないだろうか。

8 おわりに

総括にあたり、本遺跡の落とし穴について、3系譜の存在や、型式変遷、配置戦略の変化などについて指摘した。このような検討が可能なのも、本遺跡が雑音の少ない好条件であったことが大きい。

本遺跡に好条件が整っていることは、調査段階から認識でき、放射性炭素年代測定などの自然科学分析の利用はもちろん、箱掘りの実施や、土層の軟X線撮影など、できる限り多くの視点を持ち込んだ調査に努めたが、総括にあたって落とし穴の分析を進める中で、調査時の課題も明らかになった。今後の落とし穴調査に向けて、調査方法上の課題について2点を述べ、この総括の結びとしたい。

今回の落とし穴の分析・検討においては、形態分類にあたり断面形の理解が一つの鍵になった。

調査時には、長軸方向を半截ラインとするよう心掛け、おおよそ比較可能な程度に軸方向を一致させることができたが、短軸方向の断面図は作成していなかった。短軸方向の断面の比較を併せて行えば、より詳細な比較・検討が可能になったであろう。調査時に落とし穴の長短両軸の土層断面を記録するのは困難であるが、短軸方向は埋土記録を省いた外形(いわゆる空断面)のみとすれば完掘後にも記録可能である。今後の調査では短軸方向の断面記録が行われることを期待したい。

もう1点は、箱掘りによる断面観察である。今回の調査では、6基を箱掘りして土層断面を記録したが、半截のみで観察したものに比べいくつかのメリットがあった。何よりも土層を詳細に観察することができる。落とし穴の土層断面は、下部ほど機能時の情報を含んでいる可能性があり、底面ピットの構造や、底面付近の置土・貼土などの検討には細かい分層などが必然的な作業となってくる。これは、開口部から頭をいれて観察することでは極めて困難な作業である。この他、箱掘りすることで断面を正面にした写真撮影が可能となる上、掘り残しのない正確な断面形を観察・記録することができる。また、土壌サンプリングも正確に行えるとといったメリットもある。反対に、半截のみの土層断面では、写真撮影で得られる画像は底部付近が暗く、アングルの制約もあって、土層の詳細が観察しづらいものにならざるを得ない。箱掘りのデメリットは、完掘写真撮影時に全体を撮影できない点が挙げられるが、全体の完掘写真で得られる情報は、詳細な断面観察で得られる情報と比べると、あまりないのではないだろうか。今後は、遺跡の実情にあわせつつ、積極的に箱掘りを採用するのが効果的であろう。

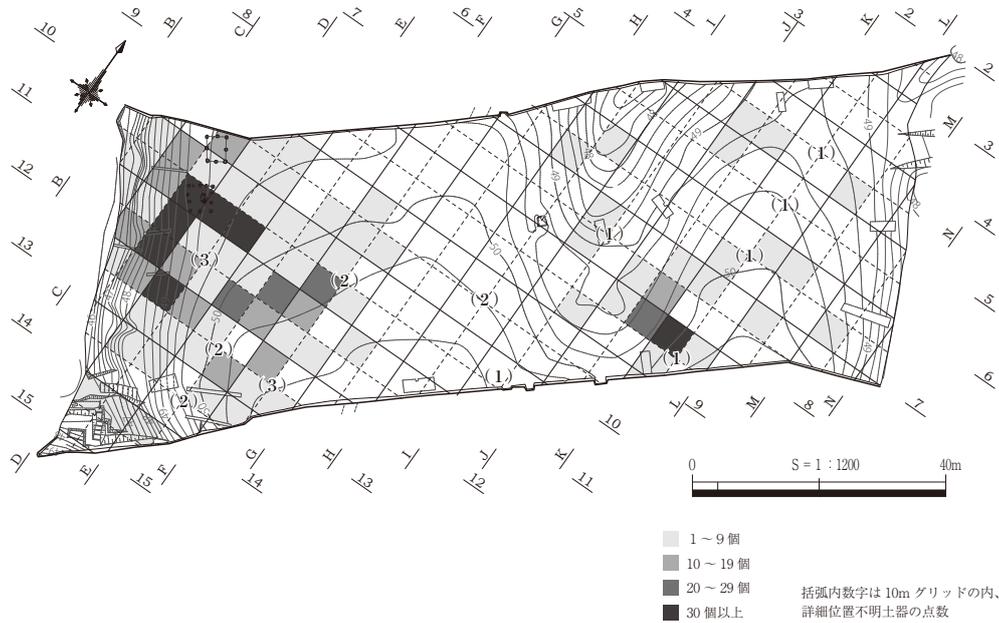
【参考文献】

- (1) 中四国縄文研究会島根大会実行委員会編2010『遺構から見た中四国地方の縄文集落像発表資料集』
- (2) 会見町教育委員会・岸本町教育委員会編1994『越敷山遺跡群』ほか
- (3) 鳥取県埋蔵文化財センター2011『西坪上高尾遺跡 西坪下馬駄ヶ峰遺跡』
- (4) 鳥取県埋蔵文化財センター2010『小竹下宮尾遺跡 西坪岩屋谷遺跡』

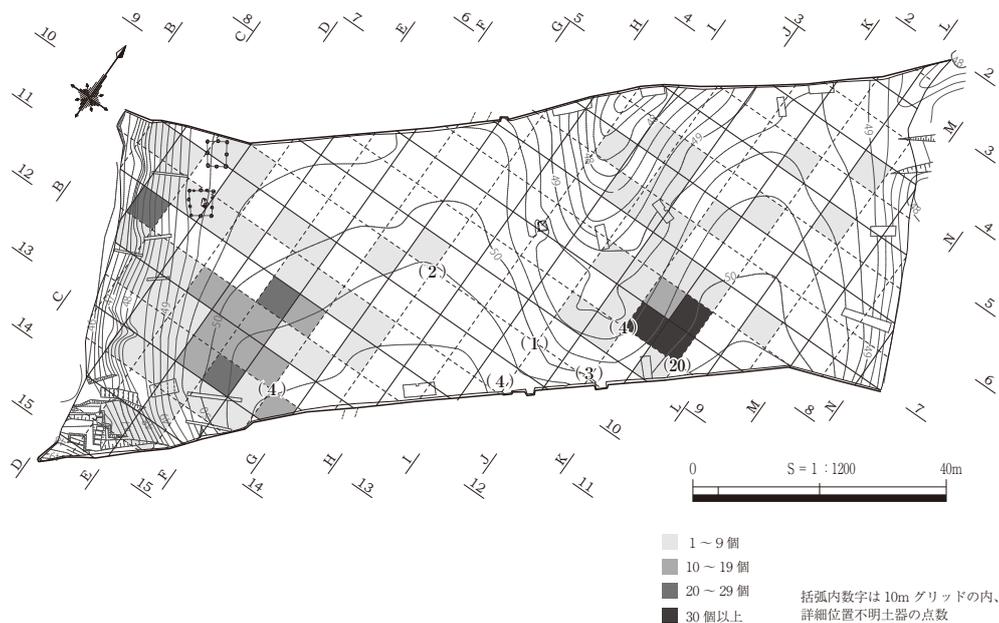
第2節 奈良時代の遺物と分布状況について

奈良時代の遺構としては、掘立柱建物跡2棟、土坑1基を確認した。遺構の数が少なく、遺構内からの出土遺物も少ないため、古代の様相を示す直接的な手掛かりは限られている。しかし、遺構の密度が希薄であるにもかかわらず、遺構外からは土師器・須恵器片が出土しており、これらは調査中においても、分布やグリッドごとに出土量に偏りがあることを認識していた。そこで、ここでは遺構の位置と遺物の分布状況の検討から、古代における西坪中中畝遺跡の性格を捉えたい。

遺構は西尾根の西側に鍛冶関連遺構と考える掘立柱建物跡2棟、西尾根の東側に土坑1基を確認し



第125図 土師器分布状況



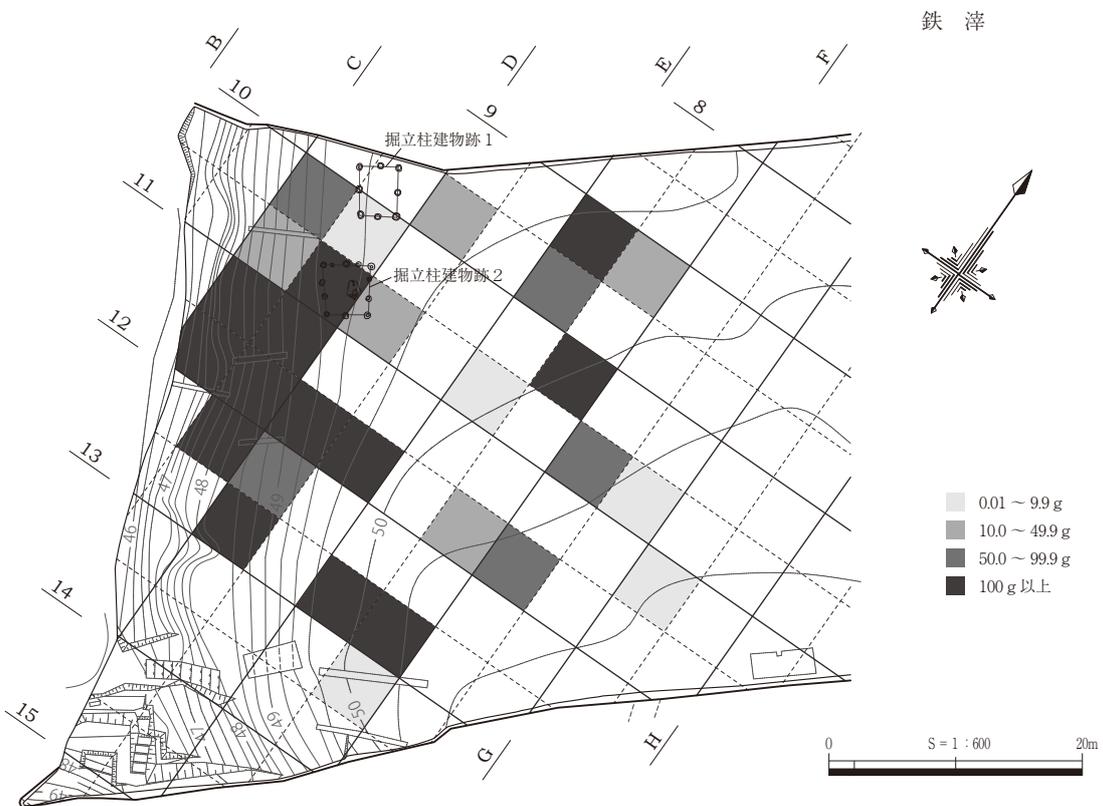
第126図 須恵器分布状況

た。これらの遺構は、緩やかな傾斜変換点に立地しており、安定した平坦面が広がる西尾根の中央や、東尾根には遺構はみられなかった。これらの時期については、出土した遺物のほか、遺構を検出した層位や遺構周辺から出土した遺物から8世紀代に属するものと判断できる。

遺物包含層から出土した遺物は、数量は少ないものの、縄文時代から中世まで出土している。このうち、奈良時代のものが多数を占めており、調査地周辺に奈良時代の遺構が存在する可能性は極めて高い。遺物の分布が遺構の立地や地形との関連性があることが想定できる。遺物の分布状況を把握するために、遺物の出土点数を5mグリッドごとに表し、土師器・須恵器・鉄関連遺物それぞれについてグリッドごとの出土点数をカウントした。

土師器・須恵器・鉄関連遺物の分布状況から、土師器は小片が多く、形が復元できるものは少ない。器種は甕や鍋、製塩土器が出土している。その中でも目立つものは坏で、内外面もしくはいずれかに赤色塗彩が認められた。分布は大きく西尾根の西側に多く、特に掘立柱建物跡2を中心に集中する。東尾根にもみられるが、西側に比べ出土数は少ない。

須恵器では坏と甕を中心とする。坏は無高台で口縁部が屈曲するものとしめないものと、高台がつくものがある。甕は口縁部の種類や内外面の調整の違いから10個体以上があったものとする。坏のように調査地内に広く分布するが、遺物番号71~73のように、J 8、K 7・8グリッドにある程度まとまって出土するため、接合可能なものや同一個体の可能性を含む土器破片が多数みられる。須恵器の分布は土師器片と同様に西尾根の西側と東尾根のやや西側に遺物がみられ、おおよそ分布範囲は重なる。須恵器の場合は特に、調査地内の南側に集中して土器が出土しており、北側は希薄となる。



第127図 鉄関連遺物出土状況

鉄関連遺物については、分布の偏りが顕著で、西尾根の西側に集中する。特に掘立柱建物跡2を中心に出土量は多く、西斜面から西尾根の中央まで分布が広がる。東尾根ではJ5グリッドから出土しているが、出土量はわずかで、周辺には遺構は確認できず、遺物が集中するような分布状況ではない。

西坪中中畝遺跡の特徴として、古代の遺構の分布はごく一部に偏っているものの、遺物が調査地内に広く分布するところにある。さらに遺物の分布状況は調査地内に均一に広がるものではなく、西尾根と東尾根に分かれ、おもに西尾根を中心に分布が顕著である。分布の状況からは、近くに古代の遺構があることが想定でき、集落が調査地周辺にあったと考える。特に西尾根・東尾根の南側は遺物の分布とともに、調査地外には安定した尾根の平坦面が広がるため、尾根の南側には集落が存在する可能性が高いと考える。また、鍛冶関連遺構と考える掘立柱建物跡1・2や、鉄関連遺物が出土していることから、集落以外に生産遺構が周辺にも存在することが考えられる。

今回の調査で、鍛冶関連遺構と考える遺構を確認したが、ほかは土坑1基のみであった。遺構が立地する西尾根は、東尾根に比べ平坦面が広く安定しているが、古代の遺構は検出していない。一方、遺物の分布の状況からは、調査地外の南側に集落が想定できる。こうした2つの側面から、当遺跡は、調査地北西の工房域と調査地外南側の居住域の中間地として位置づけられる。

第3節 奈良時代の鍛冶炉について

はじめに

西坪中中畝遺跡では、掘立柱建物跡とこれに伴う鍛冶関連遺構を検出した。この遺構については、遺存状況は悪く、床面が失われていたため、詳細な構造や掘立柱建物内の作業空間を把握することは困難である。そこで、西坪中中畝遺跡で検出した鍛冶関連遺構について、建物と鍛冶炉の配置や、鍛冶炉の構造を推測する手がかりとして、鳥取県内の鍛冶関連遺構を整理して西坪中中畝遺跡の遺構の推測と位置づけを検討したい。

西坪中中畝遺跡の鍛冶関連遺構

調査によって西尾根の緩斜面に鍛冶炉と考えられる焼土分布範囲と掘立柱建物跡2を検出した。以下、遺構の整理を行う。

掘立柱建物跡2は、桁行3間(4.4m)、梁行2間(3.6m)、床面積14.8㎡の建物である。主軸は近接する掘立柱建物跡1と同様に立地する尾根の方向で、比較的緩やかな斜面に建てられている。各柱穴は平面円形から楕円形を呈し、30～50cmを測る。検出面からの深さは約30～60cmを測り、柱穴によって差がみられる。いくらか土が流失していると考えるが、柱穴底面の高さに差がみられることから、もともと柱穴によって掘削深度は異なっていたようである。

また、柱穴について、柱穴の数や配置、柱穴間の距離も不統一が目立つ。特に南東側の梁行は3間(3.9m)であるが、北西側の梁行は4間(4.3m)となり、平面は逆台形となる。

建物の内部では鍛冶炉と考える焼土分布範囲を検出した。この焼土分布範囲とは、焼土や焼土ブロック、黒色粒土が広がる範囲を捉えたもので遺物を含む黄褐色土層で検出した。建物内の北東側の桁行きに近接して不正楕円形状に広がる。北西－南東方向に長く、建物内の中央右側におさまる。

内部は明黄褐色から橙褐色の焼土がまんべんなく広がり、少量の遺物を含んでいた。粉炭が凝固し

たブロックは確認していない。焼土と焼土ブロックの多くは明黄褐色で、検出面である黄褐色土の上面に大小のブロックがかたまった状態で検出している。また、焼土ブロックの中には長幅35cm、短幅20cm、厚さ10cmの赤黒色の焼土ブロックを検出している。表面は固く締まっており、黒色粒土が目立つ。特にこの部分は黒色粒土が厚く堆積している部分で、表面は被熱し硬化している印象を受けた。可能性としては、検出状況や観察できる埋土の状況から、鍛冶炉の底面であったことが考えられよう。

焼土分布範囲の内外からは鍛冶炉に伴う粒状滓・鍛造剥片といった微細遺物を回収している。特に焼土分布範囲の南から南西側の縁辺に比較的に出土量が多く認められた。また、少量ながら8世紀代と考えられる土師器片が出土しているほか、羽口(14・15)や金床石と考えられる遺物に加え、完形の椀形鍛冶滓(F28)が出土しており、焼土分布範囲との関連が考えられる。

焼土分布範囲を鍛冶炉と考えた場合、鍛冶炉周辺には作業用の土坑が想定される。足入れ穴もしくは金床石の設置穴の検出を試みたが確認できなかった。一方、支柱穴とは異なる小規模の柱穴を検出した。これは、建物内の東隅に位置し、焼土分布範囲の南東側に近接する。その位置から、支柱穴の補助的な役割を担ったもの、もしくは鍛冶に関連する作業用の柱穴の可能性が考えられる。

掘立柱建物跡2・焼土分布範囲については、検出面は乱れ、床面が検出できなかったことや形を留めていないことから、遺構の性格を判断することは難しい。しかし、遺構の検出状況や鍛冶関連遺物が掘立柱建物跡の周辺に集中していることから、焼土分布範囲が鍛冶炉であった要素は十分である。

伯耆の鍛冶関連遺構

西坪中中畝遺跡の焼土分布範囲が鍛冶炉であった可能性をより具体的にするために、鳥取県内の鍛冶関連遺跡についてみる。

近年の発掘調査により増加しているが、明確な鍛冶炉を伴う遺跡は少ない。伯耆に限れば、笠見第3遺跡(5世紀末～6世紀初頭)、窺津乳母ヶ谷遺跡(7世紀前半)、殿河内ウルミ谷遺跡(7世紀後半)、大御堂廃寺(7世紀～11世紀)、陰田広畑遺跡(7世紀中葉～8世紀後葉)、新山山田遺跡(7世紀後葉～8世紀)、坂長第6遺跡(奈良時代)、梅田萱峯遺跡(8世紀後半)、中道東山西山遺跡(9世紀)、伯耆国府跡(9世紀後半)、南原千軒遺跡(12世紀)、諏訪西山ノ後遺跡(12世紀)、坂長武寿羅遺跡(12世紀)の13遺跡があげられる。

次に西坪中中畝遺跡の検出遺構と比較するために、鍛冶炉を伴う掘立柱建物跡を取り上げる。掘立柱建物跡に鍛冶炉が伴うものは、新山山田遺跡SB-01、梅田萱峯遺跡SB3、中道東山西山遺跡SB-6、同遺跡SB-7である。4例とも地上式建物系鍛冶遺構である。以下、各遺構の内容を整理する。

新山山田遺跡SB-01は、丘陵傾斜面に建てられた掘立柱建物で、桁行2間(約4.8m)、梁行1間(約3.5m)、床面積16.8㎡を測る。東西に延びる尾根の北斜面に位置しており、床面は傾斜がきつくなっている。建物を構成する支柱穴は平面円形で規模は径20～45cmとばらつきがみられるが、柱穴間の距離は一定に保たれている。鍛冶炉は建物のほぼ中央に位置している。長幅1.0m、短幅0.7m、深さ0.35mを測る平面楕円形状の大型鍛冶炉であると考えられている。鍛冶炉の内部には炭が混ざった黄褐色土、周縁・下部には被熱により酸化した橙褐色土が堆積する。鍛冶炉以外では、目立った作業用の土坑はみられない。南側の桁行側と西側の梁行側に小規模な柱穴が数基みられるが、建物を支える補助的なものと考えられる。出土遺物には鉄滓や鉄製品、炉壁が出土している。

梅田萱峯遺跡SB3は、比較的緩い傾斜面に建てられた掘立柱建物跡で、桁行3間(約5.5m)、梁行

第5章 総括

2間(約3.5m)、床面積19.2㎡を測る。各柱穴は平面円形で、掘削深度もほぼ統一されている。鍛冶炉は2基あり、この内鍛冶炉1は建物の北側梁行に近接して位置する。長幅40cm、短幅35cm、深さ10cmの平面楕円形状の鍛冶炉で、断面は浅い皿状を示す。内部には灰黄褐色土から淡褐色土とともに、一部に炭ブロックを含み堆積しており、底面には被熱面が形成されている。鍛冶炉2は建物の中央に位置するもので長幅40cm、短幅35cm、深さ7cmの平面不整楕円形で断面は播り鉢状を示す。内部には椀形鍛冶滓が残されており、炭化物が固着した層と、炉の底面を再生するための灰色粘土が貼られていた。底面には被熱面が形成されている。また、鍛冶炉の周辺には柱穴が6基あり、作業に伴うものと考えられる。

中道東山西山遺跡SB6は、台地上の緩斜面に建てられた掘立柱建物で桁行3間(約4.6m)、梁行2間(約3.2m)、床面積14.7㎡を測る。各柱穴は平面円形から楕円形を呈し規模に大きなばらつきはない。鍛冶炉は新旧の2基存在する。旧炉の掘り方は長幅73cm、短幅48cm、深さ4cmの楕円形状で断面は浅い播り鉢状である。焼土面は内部には締りの弱い焼土と、周縁部には色調の暗い焼土が堆積している。削平を受けており、わずかに炉の下部構造が残ったものと報告されている。新炉は径41cm、深さ8cmの平面円形の鍛冶炉で旧炉を掘り込んで構築されている。断面は桶形で、内部中心には粉炭が吸着した粘土ブロックを含む黒色土と、周縁部は被熱によって赤褐色に酸化する。

両鍛冶炉は建物の中央やや北西側に位置しており、隣接して足入れ穴もしくは金床石の設置穴と想定される土坑SK51がみられる。長幅1.15m、短幅1.0m、深さ0.35~0.47mで平面は不整楕円形を示す。土坑内からは粒状滓・鍛造剥片のほか、金床石片が出土している。また、小規模な柱穴も2基確認されている。

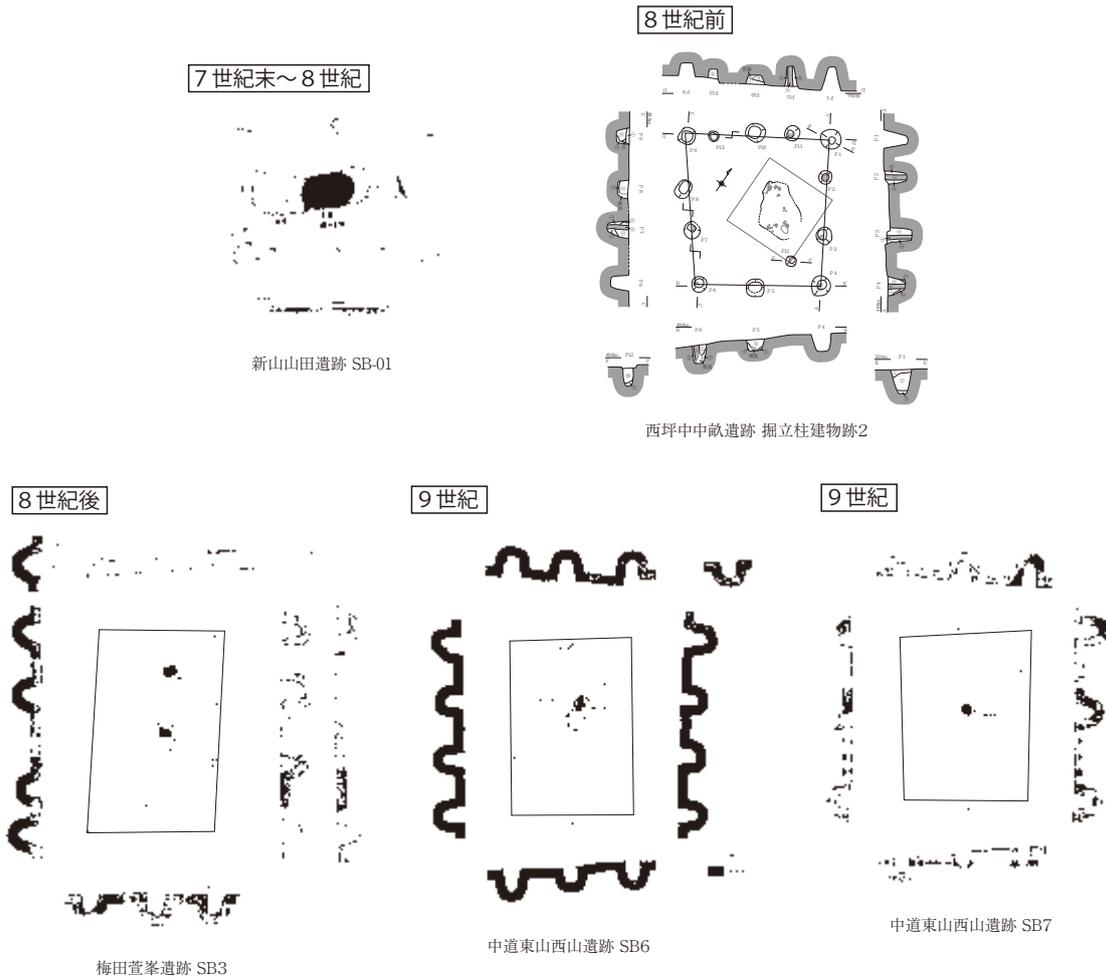
中道東山西山遺跡SB7は、桁行2間(約4.5m)、梁行2間(約3.2m)、床面積14.4㎡を測る。各支柱穴は平面円形で、径40~50cm前後、掘削深度は30~60cmとばらつきがみられるが、柱穴底面の高さでは、標高69.1~69.3mとおよそ20cmの差にとどまる。鍛冶炉は建物内のほぼ中央に位置する。掘り方は長幅96cm、短幅74cm、深さ7cmの楕円形で、断面は浅い播り鉢状を呈す。内部は粉炭が吸着・凝固した粘土ブロックと周縁部には被熱によって赤褐色に酸化する。

鍛冶炉には中道東山西山遺跡SB6同様に「足入れ穴」もしくは「金床石の設置穴」と想定される土坑が2基みられる。このうち、SK52とする土坑は長幅76cm、短幅72cm、深さ22cmのいびつな五角形である。内部からは粒状滓・鍛造剥片、炉壁、金床石片など鍛冶関連遺物が出土している。もう一方の土坑SK70は長幅96cm、短幅96cm、深さ28cmを測る。平面は不整楕円形で断面は播り鉢状を示す。内部からは粒状滓や鍛造剥片の確認には至っていないが、鍛冶炉に伴う作業用の土坑であった可能性がある。また、土坑を囲うように計4基の柱穴が確認されている。

西坪中中畝遺跡の鍛冶関連遺構の位置づけ

各遺跡の鍛冶関連遺構を概観したが、ここで掘立柱建物を構成する柱穴数や鍛冶炉の位置や構造、鍛冶炉に伴う作業用の土坑について整理する。掘立柱建物については各遺跡・遺構ごとに桁行・梁行の間数が異なるが、支柱穴の配置からは、一般集落にみられる建物と変わりはないようにみえる。

鍛冶炉については、遺存状態のよいもので粉炭が吸着・凝固したブロックが確認でき、その下に被熱面が形成されている。西坪中中畝遺跡では、上部はすでに流出していることから、内部の構造を復元することは難しい。しかし、焼土分布範囲には被熱によって硬化した面と考えられる赤黒色のブ



第128図 県内の鍛冶炉をもつ掘立柱建物跡

ロックや、還元焼成の影響による黒色粒土がみられることから、鍛冶炉の底部であった可能性が高い。また、明黄褐色の焼土ブロックは炉壁であった可能性がある。鍛冶炉の規模については硬化した赤黒色ブロックが中心と考えられることから、新山山田遺跡SB-01例のような大型の鍛冶炉のような規模は考えられない。また、遺構の近くから出土した椀形鍛冶滓F28が掘立柱建物跡2の鍛冶炉に伴うものであれば、規模は径40～50cmほどのものが想定されよう。

鍛冶炉の位置については、梅田萱峯遺跡SB3の鍛冶炉1が建物の梁行側に位置する以外は、ほぼ建物の中央にみられる。西坪中中畝遺跡では桁行側によって検出しているが、焼土分布範囲のうち、硬化した赤黒色ブロックは建物の南東傾斜面に位置しているため、立地環境の影響をある程度受けていると考えられる。立地の傾斜を考慮すれば、検出位置からは北東もしくは東側に本来位置していたものと推測するが、桁行の柱穴に近接する位置になる。そのため、崩れている状況ではあるが、ある程度旧状をとどめているものと考えられる。また、建物内の空間利用を考えた場合、梅田萱峯遺跡SB3や中道東山西山遺跡SB6・7のように、鍛冶炉に伴う作業用の土坑がみられなかったが、西坪中中畝遺跡では西側身舎が大きく空くため、作業用のスペースとして考えられる。また、粒状滓や鍛造剥片が焼土分布範囲のうち南西側に多く検出されたことも、作業用のスペースとして使用されていたことを示している。

西坪中中畝遺跡では、遺構からの出土遺物は確認できなかつたため、詳細な年代は判断できない

第5章 総括

が、遺物包含層から出土した遺物が奈良時代を中心とすることからある程度の年代を与えることができる。出土した土師器・須恵器から、遺構の帰属年代は8世紀前半代と考え、操業年代についても同様の年代幅の中でのものと考え。他の鍛冶関連遺構の時期とあわせてみれば、新山山田遺跡S B01よりは新しく、梅田萱峯遺跡S B03よりは古い時期に位置づけられる。検出した遺構については、掘立柱建物の建て替えは確認していない。また、焼土分布範囲も一ヶ所のみを検出であり、出土した鉄関連遺物の量も少ないことから、短期的で小規模な村方鍛冶程度の操業であったと考える。

鍛冶関連遺構と集落の関係については、集落内の遺構ではあるが、近接して住居跡が確認できなかったことから、生活域と鍛冶工房域は分けられている可能性がある。

おわりに

西坪中中畝遺跡で検出した焼土分布範囲は、本来は鍛冶炉であったものが廃棄され、崩れて楕円形状の広がりとして留めていたものと考えられる。鍛冶関連遺構の動向からみれば、鍛冶関連遺構の帰属年代や鉄関連遺物の種類や分析結果より、古代から中世の伯耆においては、古墳時代後期から集落内に営まれる鍛冶工房が増加する第一の画期と、11～12世紀において生産規模が拡大する第二の画期を見出すことができるとしている(小口2007)。その中で、西坪中中畝遺跡の鍛冶炉は8世紀代前半と考えられ、第一の画期に含まれるものである。

今後は集落内の鍛冶関連遺構の詳細な様相をつかむために、鍛冶炉に伴う作業用の土坑または柱穴の有無や掘立柱建物との関連の整理が必要である。また、画期ごとの、鍛冶炉の規模と構造や鍛冶炉をもつ建物の変化を把握するためには、まず鍛冶炉の変遷を明確にすることが求められる。近年の発掘調査による調査例も増えてきているが、まだまだ詳細をつかむことは難しく、今後の資料増加が期待される。

【参考文献】

- 高尾浩司他2005『鳥取県教育文化財団調査報告書101 中道東山西山遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 高橋浩樹他2009『鳥取県教育文化財団111 坂長第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 湯村功他2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書13 南原千軒遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター
- 高尾浩司他2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書14 笠見第3遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター
- 小口英一郎他2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書15 窺津乳母ヶ谷遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター
- 湯村功他2008『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書22 梅田萱峯遺跡Ⅳ』鳥取県埋蔵文化財センター